



OVERSEAS

Mongolia —モンゴル国—

海外事情



チンギス・ハーン (韃靼) 帝国の地



菅原 春 SUGAWARA Shun

日本工営株式会社 / コンサルタント海外事業本部 / ホーチミン MRT 開発事務所

晴天の霹靂

この30年間、常夏東南アジアのプロジェクト経験だけのこの身に、突然、想定外のモンゴル転勤の辞令が下った。この国の知識は、幼少の時は元寇と義経渡海伝説、長じては最近のモンゴル人横綱くらいである。記憶をたどると、確かに12～13世紀のこの国は、地球儀を片手で持ち上げた掌が覆う面積で、今の中国、朝鮮、インド、シベリア、ひいては中央アジアを超え中部ヨーロッパをすべて己の版図に入れた唯一の大帝国であった。

今回のプロジェクトは、モンゴル

鉄道会社の求めに応じ、この国の広大な大地に眠る無尽蔵ともいべき手つかずの鉱物資源(石炭、ウラン、金、銀、銅、鉄、レアメタル)を、隣国である中国、ロシア、ひいては朝鮮、日本へ輸送するものである。そのルートは中央のゴビ砂漠から東の草原地帯を横断し、方向を変え、北はロシアへ、南は中国へ通じる。我々の業務は、この全長1,600kmに広軌鉄道を敷く基本計画と調達支援で、15カ月の工期である。この鉄道計画は将来、中央のゴビ砂漠から西に隣接ウイグル・カザフスタン方面まで延長される膨大なものである。

そんなロマン溢れる国で見聞したことや感じた事を記してみる。

モンゴルの概要

モンゴル国はユーラシア大陸の中心に位置し、成田から首都ウランバートルまでの直行便で5時間半のフライトである。直行便は週3日あるが、冬期になると便数が減る。国土面積はかつてと比べずいぶん小さくなったとはいえ日本の4倍となる156万km²で、気温は夏で30℃前後、冬で零下40℃前後、極寒・極乾燥・年較差が大きいという気候特性を持っている。

春・夏・秋の季節がそれぞれ2か月位で短く、年の半分が冬である。そのせいか、何千万年もかけてこの地の環境に順応した草木の成長は早く、あっという間に落葉する。人々も、長かった冬の衣装を脱ぎ捨て、短い夏を惜しむかのように、開放的な服装になる。

総人口は290万人で、首都にその45%が集中し、朝夕には交通混雑を引き起こしており、その緩和策として道路計画や地下鉄計画が進められている。しかし、国土の大半では、



写真2 ゴビ砂漠と駱駝

人影がまばらで、放牧民に時たま出くわすくらいである。大地は標高1,200～1,800m前後の高原からなるが、周辺には4,000m級の山々があり、中生代の地層からは恐竜の卵が発見されたりしていて、ロマンと魅力に満ちている。

民族

空港に降りた時から、我々と同じ蒙古斑をもつモンゴル族であるせいか、妙に親しみを感じ、外国とは思えない雰囲気である。とはいっても家畜に依存する食生活のせいか、男女ともに骨格が大きく、男性は朝青龍顔と白鵬顔が多い。多くの民族

が混じっているため白色系も多くカラフルな感じがするが、全体的にはアジア的顔である。一方女性は、モンゴル・ガゼルのように足が長く、軽やかで、妙に腰に色気が漂っているように見える。子孫繁栄の要である腰に、どのメスよりも早くオスを魅了し誘惑するという知恵が表現されているのかもしれない。

因みに、この国の母親と子供の絆は特に強いらしい。離婚の際、子供は100%母親に帰属するようだ。だから、白鵬が朝青龍よりもこの国の人にとって不人気だと言われるのは、奥さんが日本人である為、彼の優秀な種が日本に帰属するという

理屈のようだ。

良い仕事に就くには高い教養が必要という親の勧めもあって、女性の大学への進学率は男性よりもはるかに高い70%以上である。日本への留学生も多く、流暢な日本語を話す人がいるため通訳には困らない国である。また、政府高官も留学組が多く、日本語で会議を持てるのもこの国の特徴である。

食文化

牧畜の地であるため、何と云っても五畜(ここでは牛、羊、馬、山羊、駱駝)やガゼルが豊富で、これに大方輸入品である鶏と豚が加わるが、どの肉も安価であり、肉好きにはたまらない。逆に、ほとんどが輸入品である果物は高価で、野菜がそれに続く。一番高い牛は100g当たり50円、羊45円、馬40円、山羊35円である。したがって、良い季節になるとパーベキューが盛んになり、現地職員も生きの良い羊を連れてきて、目の前で解体して見せてくれようとするが、さすがに鳴き声を聞くと食べなくなるといつて断る。

因みに、日本でいうジンギスカン料理はなく、それは日本人が考えたものであるらしい。当地に来ると食べたいと思わなくなるから不思議だ。そして、至る所に落ちている家



写真1 モンゴルの位置図 (Googleより加工)



写真3 モンゴルの女性達



写真4 モンゴルの伝統的食べ物 (ボースとホーショール)

畜の糞を、男女別なく素手で集めてきては燃料にする。

飲み物は現地産のチンギスやグランド・ハーン、ハラホルム、アルタンゴビといった英雄の名や地名を冠したビールやウォッカがある。値段は手ごろで、ビールは大ジョッキが180～300円である。祭りのシーズンともなるとボーズ（肉餃子）やホーシヨール（揚げ餃子）や馬乳酒（馬乳を発酵させた酒でビタミン、たんぱく、ミネラル、乳酸菌を多く含む）が盛んに出される。客先のゲル（移動式住居）に招かれた時には、大歓迎の中この酒を飲み、翌一週間は体がアルコールを受け付けなかった。

ウランバートルは、首都だけあってレストランが多く、各国の料理が

あり、長期滞在者にも不都合を感じさせない。ただ内陸国だけに、魚料理は食材が手に入らないことから期待できない。したがって、魚料理が好きな人は、来る前に鱈腹食^{たらふく}してくることをお勧めする。

住宅事情

もともとは遊牧の民であったため、基本的住居は円形のゲルと呼ばれる組み立て式で、冬場と夏場の牧草の状況に合わせ、住居を好みの所に設置して住んでいる。首都と点在する都市や村では固定の建物に住む。鉄道のような長大な構造物の建設では、ゲルは工事進捗に合わせて移動できる便利な現場事務所兼住居である。最近、地方で仕

事がない人々の多くが、首都に仕事を求めに来て、周辺にゲルを組み立て冬場に質の悪い石炭を焚き、公害を引き起こしている。

首都の建造物は、ロシアの政治・経済の枠組みの中にあつたことでロシア色が漂う。近年、市場経済へと移行し、建設事情は好景気で、次々と事務所ビルや高層アパートが建てられている。11～3月は気温が低い^{むじ}ためコンクリート打設ができなかったが、近年、日本の寒冷地のコンクリート打設技術を導入し、季節による工期的不利を克服したようだ。

道路事情

市内の道路は拡幅され交通緩和が図られている。ただ、首都に集中した交通量の多さとドライバーのマナーの悪さが原因で、なかなか満足からは程遠い。ドライバーのマナーについて言えば、この国の人々は小さい時から乗馬に慣れ親しんでいるせいか、どうも車は機械化した馬で、前輪は馬の首とでも思っている節がある。そのため、僅かでも隣の車線で車間が空いているとハンドルを切って前輪だけ突っ込んでしまい、後輪が隣車線にすっぽり入るまで、後続車の流れは両車線とも停止する。これが至る所で起き、交通渋滞を招いている。草原を自由自在に疾走する習慣の民を、道路という規制した場に慣らせるには時間が必要なのかもしれない。

スポーツ

この国で盛んなスポーツは、若い人ではバスケットとバレーボールであり、大人になるとモンゴル相撲らしい。もちろん乗馬は盛んで、スポーツというより娯楽の類に入る。ゴルフ好きな人にとっては、夏が短いモンゴルにゴルフ場があるかが関



写真7 モンゴルのゴルフ場

心事だと思うが、驚くことに首都近郊に4カ所ある。長い冬の雪解け後の芝の養生がある為、人工グリーンと芝の養生を待って短期間オープンするゴルフ場とがある。プレイフィーは8,000～10,000円で、この国の入社3年目くらいの学卒月給が45,000円位だから、他の国の相場からすると、高いかもしれない。よく行くゴルフ場は国立公園内にあり、「スイスのような景色の中、スコットランドのリンクスでプレイする」といった雰囲気味わえる。

一転、冬場は酷寒で一面雪に覆われ、春先まで雪は解けない。雪の結晶は大きくサラサラしていて、いつまでも輝いている。首都近郊は標高1,350mあり、周囲には2,000m級

の山々が多いことから、登山は冬場のスポーツとして手ごろで人気がある。常夏の東南アジアに慣れ親しんだ身にとって、アイゼン等も取り揃えての数十年ぶりの冬登山であったが、頂上から眺めるモンゴルの大地はまた違った趣があった。また、極寒の地で零下40℃の世界を体験したかったが、残念ながら零下38℃だった。

忘れられない体験

チンギス・ハーン帝国モンゴルの地で一番印象に残ったのは、11日間をかけて鉄道計画路線を縦横断したことである。8台のランクルに総勢34名が乗り込み、ゴビ砂漠から草原を通り、北はロシア国境、南は中

国国境にいたる旅であった。ゴビ砂漠の真只中、満天の星の下でのキャンプ、プロジェクトの成功と健康を祈る結団祝杯の美味、天然の家畜の糞の燃料、外敵に備えてランクルのライトを外方に向ける円陣配置、変わらない景色の地でのGPSの心強さ、そして何と言っても無限に広がるモンゴル大地へ、放射状に散り行く団員の雉^{きじ}射ち（青空トイレ）の解放感と生の充実感^{じゆうじつかん}は、忘れられない体験となった。

そして、帰国の途に就く機内窓から見る大地には、ナスカの地上絵ならぬ、幾何学模様のモンゴルの地上絵が見える。あの地上絵の線の一部は、手つかずの大地に、我々が縦走したランクルの轍である。

想像の翼を広げてみよう。境界のない果てしないチンギス・ハーンの大地上で、遠い水平線の彼方から、6輻の機関車に牽引された200輻の貨車が長蛇のようにくねくねと、我々が設計した線形に鮮やかに乗って走ってくる様子を。そして、その傍らには、もくもくと緑豊かな草を食む羊、山羊、牛、馬、珍しそうに首をもたげる駱駝、いっきに疾走するモンゴルガゼル^{ガゼル}の姿を。そんな中、鷺が翼を広げて、透き通ったモンゴリアン・ブルーの^{ブルー}大空を、悠久の昔から変わらなかつたように飛んでいる。



写真5 ゲル（移動式住居）



写真6 首都・ウランバートル



写真8 モンゴル横断鉄道現地調査のキャンプ地での円陣配置



写真9 祭の風景